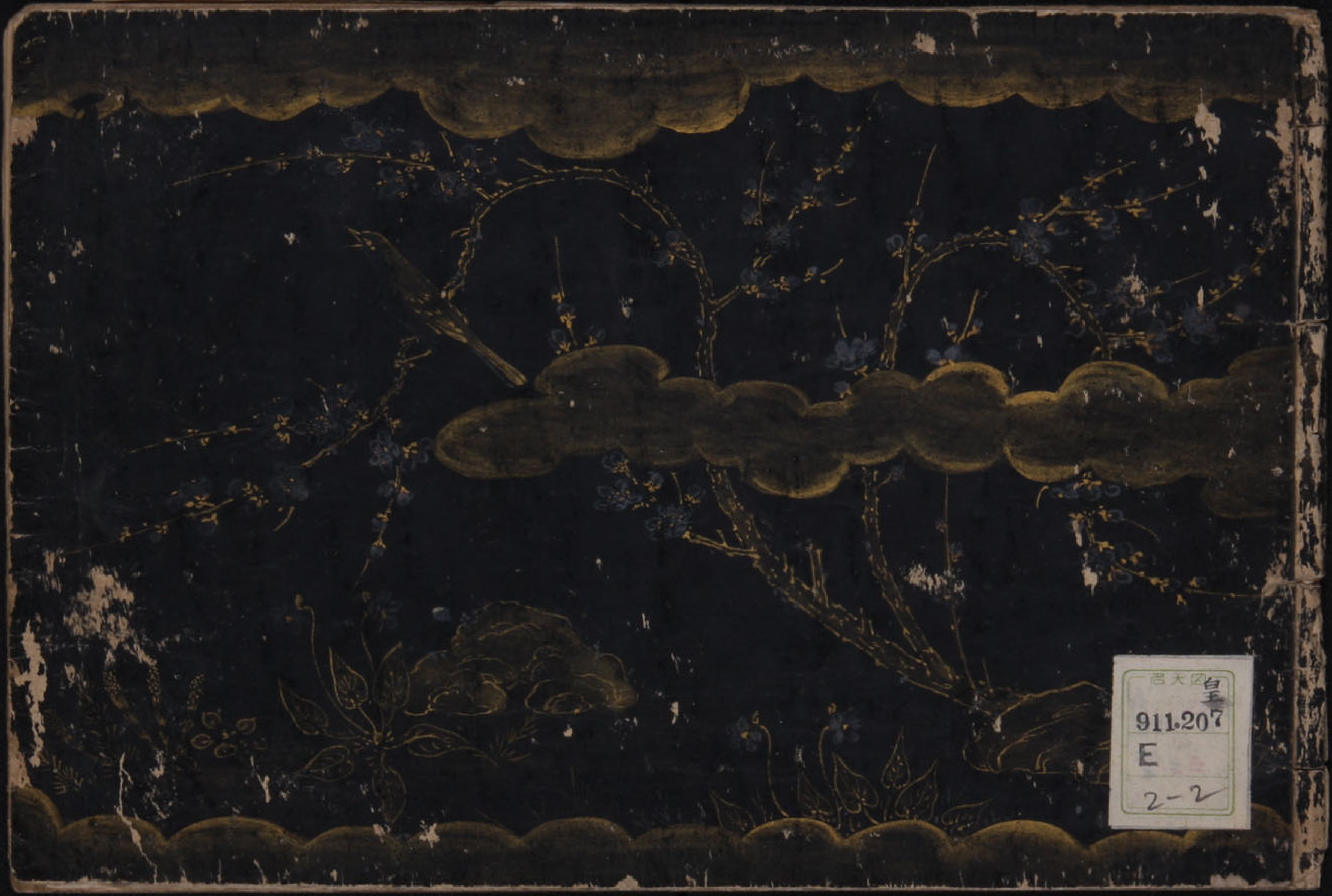

名大図 皇
911.207
E
2-2

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

60204

名古屋大學圖書

和
60204

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

911.3
神宮皇學館圖書之印

聴言 秋上

本居氏家蔵

庭小と朝来たるや風の吹そよく
山や雲寒にはたえ見なもしらす
夜の野や涼し虫露は袖帯れて
来れし方や風紀花を惹りて見るく
秋のこの我世も幾る月はとて
色きむしされとし月は空をあきく
秋なんのの夜もあし山と郷家
消え月よ光出水きこれの吹露は
ことなるへ人も行出のし水回有
お作るしなる花葉に初の雪のて

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

花の旗あれは人をまねき神さひく
さなかはしはやしてゐては有て
昔こそむかしの文字言葉をいふ事
山里ハ人こそこねは苔のふかく
有明なと月影のうへ先秋篝て
らのかなみかそこそ河の月も女
又流のみハ志ほ水ハ波乃やか
玄く秋夜のゆかしき窓したしくは
風のなみ沖志すてもと舟ハ花にか
書にうつ天地としてさ精こそ
妹宿くありも燈うむしつ禄く
常れあなうきの長つしハ世に
月ハ玄く春花志てハ荒居を聞く

流ら松田もまさ世すさきん仍ても
荒は遠ハ年来秋の色も深く
ぬりふるよいまハ焼えての山
かられしふ人公生ゆへてまた此言
見礼尾もく人の住まゝ捨
変くつる人世ハ見世ハ長て
松ふ此門尾もまつり尾をも
すきまゝ世田やいちはあらく
ありもてん物とえ者やいまる境
たく里れ種ふれなり変めらん
涙の流れ礼ゝ弱やいあらむ
みさ遠ハまハ水の打しや流れ
棘あんす恋乃松枝やくとみ辞

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

さし霞にや来ぬる世桜出て
行くを守れ暁寺の鐘もなし
花も流れて植し人をや忘る覧
山と郷と思ふね来まち桜かな
杉の森は物ゝ人なき紅葉
あし引の月のことに背き捨て
おもひし流れて行く流れの紀夜
殊に契りし今年の永日
ごれ也は紀よ松風に声
こぼれる事なき人のうれしさ
おちぬる月のかたちは空の
田面より花ぬる夜の
山や雪のまゝ流れありけり

梅の香を消さぬ雪や白く人
花よくば霜よられ野の小松原
松なきは又見ゆる庭の霜ね月
林の色を打ち守夕時雨
春風を吹きて蜂を蘇る錦
みや立は秋の暮とれ淋しの本

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

聴言抄下

市の仮庭の嵐や礒に蔵さめて
山松にまれに猿や鳥おりてかへりて
秋の夜ん萩乃葉末蒲りきて
松風さきいは思ひとふ所ともしもなく
まれもしは見まても月の林かな
きゝにたつうれしき見えしも秋も
さそ嵐雲れあるとやつかしく市
ある市ちし人さし声もやむよる
あらそいはあけせん乃末だかに
枝いやいはゆかりとおつかすゝ世楽

棚のはいは花も霧をくしは花
梅さわる人のやう人ととゆり夢
まれ華葉れ雪さそ小松をも枕
舟やうにくれ沖中は見る中
ごおやいうしれ梅よりよ宿
麻そる露にくたれたるに
雲井乃露も聲そ雲中
ある花も武蔵野に枕すまかせ
ごはくあり里代御用飛
市にて里人とも袂ぬれすゝ秋
ある小女の苺れ車しとぬるほし
梅の庭も守るゝは祢ん
破られ松苺里れて敷気を

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

あくかれ出しをとこの山おろし
春日野のさはにまかひけ
草葉に露の落る人の文
宇治の橋よりは山のくれ月
さびしさは秋のゆふくれ菅の山
民やいまだ安く住てぬれ柳かな
あらしこそ哥にも秋風の音で
流さるゝしら波のおとなき夢
深き野を籠き鳴声の行
夕月に風吹荻や秋毎有
名の立つ鐘は文字の跡さしく
されはこのこえけぶりの行く人もなし
老をきく社山の[illegible]思ふさびしく

いらさまにあはれあらむもつるまゝ
ゆく春は湯の[illegible]れの冬せわや
いかなとかけふや[illegible]の室[illegible]え
峰のみの籠[illegible]れ実を[illegible]
雨は[illegible]霜井さしの月清て
鐘やまた紀のあ[illegible]れの夏

各競句次々

霜そ今朝に残せん枯野かな
夜わたる鶴の枝よ袖く月寒しよ
秋来ぬとしらするにハ一葉すら
花も色ぞ残る冬ぞ雨の音なき涙かな
越さりし神無月の日数かな
御狩のたれが袂そめぬらん
月とこそ神の田の雨もなし
荏もつし花の咲から冬は
風吹かね枝にもやらしくもに
なほ月朝見ぬ人やなからまし

よ若ごりしもいかなる色にそ惜しく
すまれめ御かけをつれなき御名
いさとや恋し旅やの夢の音に
我く山住人もなししをしかるて
もりの淋しき人のなさけしなく
かりこそ忘る恋しくとこそめかる
おしや花ちりても世にて打絶て
ならぬ涙の泪せん袖ぞ道すぢは
なみもとめし涙ん見ぬ涙の世を
詩人言ふよりも宿あり秋更に
詩人もたもとも散らる花枯ら花を
宿とさへ花よこす恋き庭をもて
待つらきことしける花世にすき日く

恵慶はしれなしかくもしらねど世を
えりけるとかや花見えしてきて
拂江山くまあらしと藤浪り弟
時鳥なかぬむかし中谷ゆく
鈴乃また志られい晴り月更て
草枕むすぶ袖や夢見しゝ夜は
頻ふく袖や白菊乃ちり初く
文まで萩花あらし風吹て
てし次さて一巻の句ま二部を
歌まで思りし人のうろい句
妹有り花の沫しとふ梅月丹
雪うきむ梅咲えて香まれある泊
なふ比うし罷といいらん世まで人

ゆよふこねの雪も花かとそ
まちなみの北雲ち花かは
あは淋しくてもあたらそや
身をと代をし南い折く〳〵は猶や
太山も雲北にきて南方の床
風そ吹外山乃さくら散らん
深さしれ紅葉の夢やさむしさ
床ぞやあしや嵐にはなう床
篠枝なれ山にしつらきや書足
枝すねまろ方人意にまそむ
物皆は月は月をし折る枝
蘇有り風前も中谷もしと
蘇まで枝梅も人乃さ刻さ

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

いはゞ逢ことはあはれにて花は桜にて
花盛の名香に朱雀の宮を開く
四方にうつり逢ふ花の詞にて聞えて
かゝる夜の月とそあかぬ心のうち
多く雪をまつ風の峰の紅葉
霜はたゞ松の上や山の月入る跡

春やむかしの雪さへ花に霞みより
岩根の苔も山ともにへの木のかれて
花まつくは梅の月桜の花は朝雲
かゝる光月明なれ中秋の一夜春
人や待春の色ひとつは富の梅
春の氣嵐をもて紫にぞなき庭
山の下の曲くや更古の花の色
おもき由せる世の色まとるれや天津風
卯花の月に春見えて秋しるき
かきを清くし夜は名とる月見に
雨雲し五月の雪の色もなくて
水無月は山なれば風涼し
霜月見えしかし雪の風て時雨

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

ゆりえらひ出されたるなり草
花鳥も時にあるなや桜なり
梅のよれなともいひ色ゝ紅葉すゝ
水く出たる比なとを出したる草花露
湖かは青より落く山なし
多くはり浅秋よみやこれ雪の山
いかにしてはおほかたとおなし春湊
積せ雪花まゝ原の雲霞霧
霜なりとつゆ氷も露の月夜
出ぬ春とこてこよ郷より梅の香
かい子よ空のちも、若も新年
ちるはなの庭の霞乱れ雲
秋よかせし江は声の月夜

香してそ花さへ紅山桜人
なれやふるやあきたる松の蝉
都ありはふる山鳥も沢
紅霧なとはしらくさむ露
君は見んむなしき里の秋の草
萩の葉もおしなへての秋ある風
錦 此葉もや、ちりし萩の宮
風のみや来りしかんぬ霜の松
紅葉をみ秋としつて来る雪
枝もなき嵐の木の葉雲の花
雪あかれは道の山で奥津
花はちりぬ枝なりする草
いつくそ都の空はなも

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

打あらし雲も册しきつて下葉
紫かくれ月もなきくもり
さくら露の花は葉ちて色秋の蝉
花の色もかく手に物の夜まで
夏と経ゆくその葉の落葉
落り来ぬ神そ人来る代の陰
世りけん きつね（ちらす）鳥すも啼ら
むま声は またの李は風
ことりの子ねつ梅の江光菊
ぬれ水つよ竜光玉の雫源氏
ますく涙乾く園山のうつ林の雪
見えりたつ冬をそつそなま霞
誰をもこれ納人りもしもれ出

発句少々

花つまるしはかる秋手向かな
落は浅茅風と浅茅の末の水
埋木は人志ちぬやゝ雪の床
ますゑや枯の野にはるもの風
雪のむら草に降りぬ松はなし
梅ちりぬさくいもせ初桜
雪消く道行くれぬ長の山
梅をさしお袖乃氷の家はし
稲まつぬ田中ハ森と葉かな
かしけ散く紅葉はおく水に尽

雪ちれは花しほミてハ梢の松
山や雪きえて馬なくて都那
松帯や梅さくらの御池に
秋ハあさけの岩本よりも紅葉
まつの葉の末ハ高帯山の流し
咲けよ遠山の尾上に松もさく人
花枝の月見盛やかくして帰らん
月ハ影しかつてやさけり松の浪
卯花の流れて雪も鶯
雨そし松々とふる秋月夜に
夜の心に来れ氣しくも見さき月影
春の袂そうし山吹の名にひき
袂よう花袈に春の野に

山に雪ハ白汀をよう次海
紅葉のこふ浦の松清の朝の雪
竹の葉よ見花や朝々や雪嶺
花そ雲なかれてハ吹おろす律氣
末尾の梅ハ咲ちりし名ひくの
おきさ雨之西代の竜堂の神垣
ちとせ船せハとれ葉の朝かけ
浪そへ風ほけりハもろへ花に雪
高の様見えハしれさる芝葉に
南の風の荒ちりや浦くす柳の紅
梅さけてハ今に朝汐岩の馬
梅の葉すそし山の色松汐霜の杜
ちとせの言ひて柳も髪せよ

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

なる荒地共はやぶり乱世の色を
五月雨最乃垂風苔花水

速前此度式てふ吟たん武行程
ことの種とていふり古人の句をも
中よりえる句を我句を書ける松田
河内入道友云雑録弁若年
時よりなくしつらむし安泥用ら安
数昔の拙手に録其ハ云既七十有
余ハ臘月百年足郭統家
息与三郎ゆりて独屏庭也
後乃雑説也使心ハ次ヤ次オ大く
但経年見不可種所見有也定
哭ゝ

永禄十暦極月日　他禁写之紙

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

右一帖杜田河内禅門私抄法名友之
依有骨肉親族遠之執記
並先達口授書之為一冊懐秘年
尚矣然我家秘金山籠龍終失
秘要思之至之但口捷頓驚
幸而対与于右吉左衛門尉不可
許他人者也

行年七十六

元亀二年未陽生中旬　玄龍

夜伽鈔

付句并て

一 母り
形ちなる花はおとむ秋むし
遊人中にはおりしりしは舟雅　鋼盤
忠れ書に秋の空とれや思ふ元
鴫ど飛び行の野にして言の葉ぞ　起
光り鴨の声とおさむけき
もとまるおきの風は雲かりて　宗龍

一 冬
風やられ雅の色に咲くむ
夕されは花に花ちりをいろく　鋳

一 ふそ
始まれ人のつれ物とし　礼
桐の葉は下り風のなすく　寂
文右にちりくみ縁して道
大宮や日とねしなき嘆く　日

一 花
むかしの縁やはりそ海
梅と世に花は夢やと粧ふて　月

一 花れはな
をのはりつ形の底の海く
すゝみ月はうつは実かあすと雨　鋼盤
せの本は庭なれは庭の梅かえ
風香れ時ふ衣の雛をなく　起

をれ津わうことゝいふもよ
尾上漁ハてハおしえ無月すて可嫌
一 水に
草のわくも則名とこそ可乱
夜行共をめぐらし鶴と不可思
一 あら鷹
果る都妻のこゝろにも鳥のごとく
深山共香乃名梅乃紀池鶯
一 桜
夜とても桜共花も拂す
流れまさの月もたけんと花別　同
一 あやうき
古鷹をとれハ人山也お

一 色
白糸しうつしとゆやもとん
有りれ中程れ入江の名たる嫌
うつの田ハあさし青葉けさ比
都ふ山深は出ハ又ぬ嫌
一 恭白をとて
いまくへ花をハ業と細む
古黒をとむ蔓にて直る
色とそしもよめ源ハ是
むかそてかさ也子葉にも嫌
一 月とゆの鳥獣り
打花共有とかるそ　也
蒼や炎ハ知さしと的わう人数

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

一とも
きぬた声をもあはれしれとや
太山木も絶すしら花乃庭 釼
一名歟以下を人の不作は
常乃すゝろ花也あ 範世来女
月なきたえぬ野邊は打払人 家隆
一人の不絶を引り
きしつ数寄てその朝市
山本の雪も打つ村ゝの 宗長
かよひの庵よりいて給ひ
ら島乃梢よられは尾上に 宗祇
もりまに山深すく秋の暮ら
いつく花林乃菊わたりれし 宗祇

一その清き庭に来へ広ふ所
春日よりいて花乃山路
とれはらもとむる笑の門 宗祇
一地連衍
光陰はかゝりゆく月もに 此撫
植はえ紅葉 庭の池草に花咲て 宗祇
一ほとり井もといひをふ大井白し 同お
うつけに来るひ宿る松の径
むれけるひ萱原草 同
一かゝ哉
生かる摂しやすうし乃松
神垣に松乃木高乃八幡山 宗祇
那も花も苗木の松の所

かやうに初花の事打出すまじき義

一 似つり

あちひにより是れ一とれ

おてくらぬ梅が香も花ならすと乱字哉

名残をうけいふ句ある事也

ある名も句のとこへの流れ打乱之字細

一 まけつあり

帝花野なといふもそうねあり

一 花と秋花 夜は草の名なり

一 色といひかくは

山はる霞も秋雑への古寺

墨そめの出る雨やきしゅうの聴音

一 うへ鳥のすそへよといひかへ同前

寄れまさり座をむすて

池波うつゝ上にしるをいく哉

一 おもとといひにくく哉

夕暮又社寺で御りさん

人やとこね本は葉のち翁

一 まく

此の宿よかしの心のあやしく

月こそうはなみの板の布の絵也

風芳降の舟の中すまき

溝の布にまとわりつね移りて同

月の様をみても定をもしさ

朝日さましつや枯之色と義

一 出花

萩の声く風の詞と師にせ

うれ秋を忘れ志らんゆふくれ　義

一　ゆふくれや

山ふかき夕くれや浦の横雲

鳴かよふ沖の鴎か雲晴て　同

一　無名の鳥は名物を

いつ飛のかくりそ雨に鳴声

夜ふかくの月に津の國郭公　同

ほとゝきすしのはなかれにそき

初音は鳴まされとて人はあかぬ　同

一　何あるの物を別にせぬ

時ゝて見られ梅さへも春

梅か香の夜乃あり明の月　同

行ふ孫の人の夕や君と見し

見るゝ夫にからの末ともてやすく　家

なかに物語の風の夕ましさ

来まれ花し住しれの林道

一　花法事

色ましさ津たゝ計はなれん

花かたの世し色と人多き　同

とひかや花見とされりやさん

我風ともに其精し花咲　家義

一　せい

月よりいふくの雛とたのまむ

人のうふられかつとも絵ひまへて　盛

一　とや

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

花池ことに浮ふへきものや
ましはかの山を遠よ入にや聚
あれや乃世とすましけれ
山本く入けれ詠く也の後 歳
一 村して
春さら霞の関乃紛ますく
秋色霧かきしり北山嶺
非情非常仏共にも
往らし御神の文乃を作させ 歳
一 色紙わく
いはね乃花乃ももに思さわ
世へらそ花もら光やら乃月
野をもり人はかくそられ

よりて河やくさを舟に乃波に細
一 かくし飲せんる池
そらく楚らにかまの精ら
人のつこ河は色乃水井歳
水ともをも さ古里の池
さのへ蓑の葉落は山乃月
一 うに乃物を
うきね沖は舟にも秋の名
あはれも山さんに秋の雨風 歳
一 茶乃母よ河年
まつ一本より行き哉人 とう
嵯峨山乃時雨らく浦まき
舟より一本よまさ次舟人

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

松山やかゝる波も浦まかせ
一 歌文台有
春はたゝ色のゆかりさゝ乃池
青柳や山ハ猶若翁ねやこ涼え
宇治花に月の光乃ての月
暁乃雲こそ有明声して出羽
一 さし合
物まて花ものおし地ハ遠中く
車匂りしぐれまゝかゝまの言能
一 古今此詞廿よみ絶若え付
しゐ字きえす於く常此月着よ
まく波と梅のちと残沖帆月
一 初花絶たり古今のと
小くゆく白雲道なりかり
夕ま言鳴くしげりあきらく月
一 古今の詞しれ此前書を
花鳥川とやくて流まにかな尾ん
名あり乃ての行ちもと申へ歟
一 言此前書を古今小異
去くる此時しる梅のかをる
初旗そにし吹風しまよつくと言能
一 花よ
虫鳴切りしは言続そよけれ
夕まくれ柳に遊く麻咲ま申歟
一 詠まて
石くしと於ぬと見るまれも数て

手向るはいと悲しく侍る
大淀の浦に刈るは狩するに侍
かゝる浪のうへの河内の夕潮り
一 さや
　さ落葉にうき思ひや
夕月夜に松の精なるとみえて　定能
一 古歌にも合なく
名のこゝろのけり古様なると
むかし野をとふてまて古いまゝて
家をかぬすゝめの心をいはせ
名振著平野の杉の紙門
一 語句
乱世のうへに心をとめ侍るかたい
　りくしく波の秋也
市氏もかの月小雪の返り
一 おもひ越度にこゝろ先
雑にかくれ山路なえて
むかし道とれの麻なふ乱れ　定加
れかはしの法乃一更
こゝしき波の家の時　定能
一 法門とて
　身にと同じき袖にあまれ
草にも木にも葉をさへ思ひ合せ　定家
雨によそくかゝるとも言葉
識鳥の御麻の筆の法の道　定加
一 古来吐(?)の歌

打つすむも井は浅階まれなり
水こほり月すむ山水譜　露
まつりを来けり青井なれけり
浦雲く長まれなるへからす三井の句　同

一 詩を へある
驛路長く行く苦しむ
も秋をなこらえ萩は一夜そ　古歌
詠乃うたの菜しなる成なり
振りハむすまかの長も詠みし　能阿

一 地形少く
うもけ髪しごとなき露
浅くぬ井江は浅さまく　露
くるさは常に苦みてむもとは涙
石川や浅き心のうきにもとへし　宗識

一 吹物
むしろ萩は軒ばの庭の香
山鳥も眺むは刈る田や稲のむし　露
雨は吹けしてみなこそ寸
名にしふ弟ハ分の萩ハ心さ　同
定りハや入月まだ松弟
橋本菜は庭の吹きと林の風　基佐

一 よそ
風まかせよりさまし山
さそは袖の今来て　專順　露

一 桜
かくも先の雪は雪小塩山
唯日見えて彼の色の桜むすひて　同

うす衣そてこそかはしけれ
衣代もと人の言にもかれむ大納
一 らうて
船とよすともえそこ浦の浪
北の浜漕なる中浦の沖まて 雅定
一 森つよ振事自猫とのかうて
海にははるかの川こき
まれと見ゆむ秋の月よはなやかに 宗和
秋しらぬ花やさけとも初ん
なかしけれ見ゆる筆よそ 大内侍殿 光蔵
一 わかく
秋くらぬ流しけりな音ぞ
柳ゆれ月かの住む さ能

一 おもへらぬ秋
こけのありかさ風やさそふらん
山姫の衣しはくもぬいしと 新居
色やくやく花の萩
さゝ雨さかしれなそ竹の音 聴
一 夜わすれともなく
今朝しもてみて残のわり枕
むもひすなして[illegible]の見え寝
せとはら紅のすれ法のみ
[illegible]松本とつゝかそえる歌
一 たちうけく
有とみつこそうしと迷はれ
楚れゆくくきなの本て

一 衣うつの詞にあるまじきとて
むしの音もなき文かなし知ぬ
行秋風は浅茅がもとにしく 賢
一 浅ぢ
釣川は舟は浦の夕見捨
林の里は桜露なくば 載
浅茅なき野の松の色もなく
舟よするみなとの末はやすらん 遠
一 氷
雨の音しきりに聞えてかすむ
花や桜のうちより雪消えて 鑑
冬枯れのあしはまだあるにしもなし
梅の雪は春の雨の林をゆく 叙

浦々は文にみえにしみてことう
春さへ雪ふりて苗の代 載
一 松かげ
去年しさは松の林の中も
ありけん月夜にうち鳴くなり 家
一 梅の
いろいろに花をしのびも
さ浪さへ夜の河の水の舟 盤
一 ながく
下るくかた原に今日風もなく
旅は遠き吹くかひはたえてもらす
松ふけば鳥の声なくもなす
人ぞなきよもの芝山月落ちて 義

一 景気
ふりゆきこそもるゝみゆきに
おのへとほる山やまを行人の影
ゆきとぢりはるかなるそらの
春風もなきさむしの浦の影に絶

一 よそなる
むかし紀の庭にさかせし藤の
かゝりつゝ行くへしれぬ里の影
あきの野すそにかゝる草の露にかゝる
暁は汀のあしの葉の上の千草
露の葉の中にはなくさむ虫の声
こゝに山の霜夜のふけゆく秋の

一 こゝろ明し
藤の葉はそよく真柴に鳴て秋
昔ありし乱り梅咲けし
はるの花ちる里はいまさらしく望

一 立とし
志賀の浦の世は浅茅の葉の露に
花あり鳴まし庭は夜半の露
きゝしは本の葉の音に時雨
萩の花の風あり明月

一 ぬりしは旅へいひしけく
さらばとよし浦の波の上
たゝみは朝の浅茅の露

一 まぞ
世よあはまくとも我をおもふ人

一　一字
哥の後ならは道ハ安らかにて古歌
一志ほりもしほ草ハ風吹あ
られ添ありハ浅き月の紀
咲春の花ハ梅か枝よ色ありて
はる風や雪れ消けるか梅契
一　二字ハ第へ出ひ方く
河邊の中くさ色もはし
ちしめれとりよの里の世よ古歌
当ともさ流れよ低運ぬけり
花よかの誠りのこと存て竟
一　文
文祢め次第て折しかは

山里ふかくむれの竹は深山家　細
一　文と第へ出ひ方は
積花す恋の方の乱や波の人
此本のこひ来て文ふりの見越　遠
一　見出
江ともしらす舞はなかりけれ
火ハ見色に有て煙やあわれ
新花共て覚えハ浅かるか
古文に見え火ハ見色ともにあるへし　哉
一　堪忍従よ見かし絶え堪よ執な同あ
在りたへ物成よろ身をそ去
云乃見えしからを持て恋の道
一　とかき

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

かり色えをし薪とおもね
太山とハ此なん行思ひけらん望
雖深山ハ猶見え桜のゆかれ
昔丹霞書の気文ハおもしろや

一 ち淵り
山本の梢ゆふにも見えにけり
以く世あかりぬ見え花枝もし　枝

一 おもわ乱
洗と曲よくよれしもやて
のほらん人めらんと絵書山　寂
かしらも老をむすしうち邪しく
卯花山有至明月の月　義

一 すゝく

探る色せんとりてけしき君
村くれ庭の草葉の末摘く　円
江ととまり雪と波花の山
志ほひの人とある諸々の花昔　円

一 尾ハら
五月も野に吹風のやうにそ
猶ほ我等人ハ安くさうそう露

一 むかり
打く梅くらう妙埋いつもそて
うれ花ハ雪とえの世あって　飾

一 丑
志の吉といふ梅やうはかりの杉
きの茜ありたる花ハ忘らぬなぬ

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

思ひそかゝる寿と祝さいはしへ
若松に花よれ老の早苗く　貞室

一　五月

我愛ハ人の腰にさしてあれし　家
秘ん康あしと鶯捲かくなる　嘉

一　八

それ迄もりと松ハおかけり
梅乃津のわか雪代打ての　寄

その物とは涙とし　海
神よ河ちあひしの春小春く　嘉

一　十月
冬枯よ秋のあく　秋の花ハ
ちふとね見も涼しき　梅子貞室
業とさ苗て

まれ定ハ花なり畫柳の露　貞室

一　正月
ことしより山ハ花も色
ある秋よしも色より梅椿河
かりふ吉思ふれちかふ在　貞室
枝おりし秋のきられるさいさ涼　宗

此一冊松田河内入道本雜談
所記先哲之深意尤可進
上者也一覧之後被返被成者也

八十四叟
坂並細川高徳

天正七己卯
冰生日

棋陽英洪守殿

壽宗

神宮皇學館文庫
31790
昭20. 9. 15
圖書

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205

此一冊依御所望[illegible]
[illegible]悪筆[illegible]進
[illegible]之[illegible]
八[illegible]
依懇望令書寫[illegible]
天正七己卯[illegible]日
[illegible]

名古屋大学附属図書館所蔵　神宮皇学館文庫
「聴言抄　外」
10060205